

ケアマネの出会った 家族たち

2

～ 家族理解と家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

隣の家族の物語

近所付き合いも希薄になりがちな昨今、隣の人がどんな暮らしをしているのかさっぱりわからないうちに、大きな事件が起こったり、孤独な死があったりなどをニュースで聞くことがあります。最近では、所在不明の高齢者の問題が話題になったりしていました。個人情報の保護という名のもとに、地域への必要な介入が阻まれ、人の優しさや思いやりの届きにくい環境になっている現状も否めません。気になる人がいれば声をかける、事件が起こる前に何かできることはないのか、もう少し気軽に気楽に自分のできそうなことがないか、あるいは、多少の面倒を引き受けたとしてもそれが長い目でみれば、暮らしやすい環境作りであったり、人とのつながり作りだということを感じることができる世の中であればいいと思います。

市民としてできること、専門職としてできることを丁寧に考えながら、関わる支援対象者の環境への働きかけを通して、地域や専門職自身の力をつけていくことが大切だと感じます。個人情報の保護というところに逃げないで、地域につながる、地域につなげる援助の仕方を身につけていきたいと感じます。

集合住宅で

シズエさんが、妹を頼りに長年慣れ親しんだ都心の社宅を離れ現住地に転居してから、かれこれ10年が過ぎます。夫の仕事の転勤で各地を回りながら、定年間近の夫は東京での勤務でした。社宅暮らしから、退職後は自宅を購入して、親しい友人などとの交流を楽しみながら暮らすのだらうなと思っていた矢先、夫の突然の発病、急死でした。夫が元気であれば退職後も夫婦寄り添って暮らし続けたはずが、夫がいなくなるとは、一人身は不安です。遠く離れた北海道には妹が暮らしています。少しでも頼れる

人のそばで暮らしたい、という思いから、現住地への転居が決まりました。その決断に一人息子は一緒に北海道へ転居することにしました。息子自身もまた、勤めを辞め、新たな地での就職です。そうこうして、70を過ぎたシズエさんと45歳になっていた息子さんの暮らしが新たな地で展開されることになりました。

頼るべき人が妹しかない土地での暮らしが始まりましたが、気品のいいシズエさんは少しずつ近所付き合いも始めました。田舎の人懐っこい住人たちです。玄関先の立ち話から、「ちょっと上がってお茶でも飲んで。」おしゃべりに夢中になってお昼時を迎えると「一緒に御飯でも食べましょう。」そんな展開も珍しくありません。

シズエさんが引っ越してきてほどなく、隣に越してきた、一子さんとは、よく話をしたり、食事をしたりする間柄になりました。

シズエさんは料理を作るのが好きで面倒見も良い性格です。食事時には、家にある材料で手早く食事を作ったりしながら、もてなし上手です。そんなシズエさんの好意に素直に甘える一子さんとの付き合いは、毎日のようになりました。一さんは、夫を亡くし20数年も一人暮らしをしていました。一人娘は隣町に住んでいますが、長年の確執が親子の交流を疎遠にしています。一さんは、長年住み慣れた家を払って、この公営住宅に移り住んだのです。元々、商売をしていた一さんの人なつっこい性格や話好きが二人の関係を結び付けました。シズエさんにとっても、親しい人がいない土地での友人です。楽しい付き合いの時でした。

そんな二人の関係がぎくしゃくし始めました。体調を崩したシズエさんが、一さんと一緒に入っていた趣味サークルの旅行を欠席した時からでした。体調を回復したシズエさんが、近所の銭湯へ行った時のことです。銭湯で顔を合わせる人たちの様子がいつもと違います。「まさかね、シズエさんがね・・・」という声が聞こえます。不思議に思ったシズエさんが声をかけます。「どうしたの？」

そこで、言いにくそうに話始めた友人がいました。

シズエさんがこの間来なかった旅行の時に、一さんがシズエさんのことを泥棒呼ばわりしていたと

聞かされます。

これには、シズエさんもびっくりです。何のことかさっぱりわかりません。キツネにつままれるとはまさに、この事でしょう。

それ以来、一さんの話とはどめをしりません。シズエさんが物を盗んだ、シズエさんが一さんの家の前にゴミを捨てていく、など根も葉もないことを噂します。

周囲の人たちは、シズエさんがそのようなことをする人ではないこと、一さんの方が事実と違うことを言いふらしていることはよく理解しています。けれども、噂話の標的にされたシズエさんは心労がたまっていきます。ついには、体調を崩し入院です。今となっては、あの毎日行き来をしていた頃の事が嘘のようです。お隣同志は、今ではまったく接触がなくなりました。

一子さんへの支援開始

一さんの事実ではない噂話とはどまることを知りませんでした。周囲の人と一さんとの付き合いも遠のいていきます。

一さんの一人暮らしはだんだんと難しくなっていきました。曜日が理解できずに捨てられず溜まっていくゴミ。立て続けに体調を壊し入院。民生委員や一人暮らしを心配する周囲の人が、地域包括支援センター（介護保険制度において、地域高齢者の総合相談窓口）に連絡をします。センター職員が本人の元へ訪れ、自宅での生活を支えるための諸手続やサービスについて説明。介護認定を受けた一さんの元へ担当ケアマネジャーが関わり、介護保険サービスが導入されました。

自宅での生活を整えるための訪問介護ヘルパー、定期的な入浴サービス利用などを目的にデイサービスの利用などが開始され、それに伴って、一さんの一人暮らしを支える関係者が増えました。ケアマネが中心となって、サービス担当者や民生委員、近隣住民とのやり取りの中、一さんは生活できています。けれども、隣のシズエさんに対する被害妄想や、事実と違う噂話がなくなることはありません。根も葉もない話を続けられるシズエさんの心労は続きます。シズエさんを心配した妹が民生委員を通して一さんの噂話の状況を訴えます。

どう応えることができるか？

さて、一端ここで状況を整理してみます。

この事例で最初にスポットが当たったのは、一人暮らしに支援が必要な状況である一子さんでした。一子さんへの支援が開始され、近隣住民の生活の安寧が得られていれば一件落着でした。けれども、一子さんへの支援が開始されても、近隣住民、特に隣家のシズエさんへの影響は改善されませんでした。一子さんへ関わる関係者が連携を取り、シズエさんへも配慮しながら、地域包括支援センターがシズエさんへ関わりを始めます。シズエさん以外の近隣住民は、一子さんの理不尽な行動に呆れる一方で「仕方ない人だ。」というあきらめも持ちながら、一子さんと距離をおきながら生活は続きます。そんな中シズエさんの気持ちだけはおさまりません。

シズエさんの心の中には、どのような気持が生じているのでしょうか。自分には非がないにも関わらず理不尽な攻撃にあうシズエさん。近隣住民は事実を理解し、シズエさんの気持ちもわかっています。「気にせず、放っておきなさい。皆、本当のことはわかっているのだから。」周囲がシズエさんにかかる言葉は間違っていない一般論です。

一方、勝手気ままに過ごす一子さんの元へは数々の公的サービスの支援があり、一子さんの気ままな生活は何食わぬ顔で継続されています。シズエさんの腑に落ちる訳がありません。そして、いつしか事実を理解してくれている周囲からも孤独を覚え始めているのではないのでしょうか。

不満や思いのたけを解き放つ時が必要なのです。

シズエさんの訴えを受けた行政窓口が地域包括支援センターへ連携をとります。支援センターでは、一子さんの担当ケアマネに連携をとります。

ケアマネは、この状況を受けて、本来であれば、シズエさんは、一子さんに言いたいことは山ほどあるだろうと想像します。けれども、理屈が通じず攻撃性の強い一子さんに面と向かってシズエさんが思いをぶつけることなどできる訳がありません。今こそ、シズエさんの不満や思いを受け止める役割が、一子さんを支援する側の自分（ケアマネ）にあることを察しました。

訴えられた思い

訴えを受けた民生委員は、担当ケアマネや地域包括支援センター職員と連携をとります。担当ケアマネは一子さんの生活状況を再度アセスメントし、本人の妄想が助長される原因を考え、また精神疾患の可能性もないか受診の必要性を検討し、精神科への受診がなされました。一子さんの現在の状況は精神的疾患ではなく、極端に偏った性格によるものとの説明を受けます。生活上の困難さが、周囲への被害妄想や攻撃という形で自分を保っていると考えられ、生活上の困りごとを軽減することで、その症状も軽減できるのではないかと助言がありました。本人の生活が不安や不便なくできるようにサービス担当者とも連絡を取り合い、具体的な支援内容を検討していきます。

地域包括支援センターでは、シズエさんの心労を少しでも軽減できるように、介護予防の視点から、シズエさんを訪問しシズエさんの話を聞いたり、気分転換を勧めたりします。

そのような状況の中、一子さんへの介護保険サービスは増やされ、訪問ヘルパーのほか、ディサービス、訪問看護、と関わる担当者が増えていきます。サービスは増えましたが本人のシズエさんに対する妄想は軽減しません。

シズエさんの心労はいっこうに減りません。

シズエさんは、時に一子さんの元を訪れるサービス担当者呼びとめ、サービスをしているなら、ゴミの始末などをきちんとしてほしいと訴えます。自分に向けられる被害妄想に対する抗議ともとれます。シズエさんのストレスや不満は解消される気配がなく、その思いは行政の窓口へ訴えられました。

隣の住人が自分に対して、根も葉もないことを言うこと。自分を泥棒扱いしているので、何かのほずみに自分への攻撃が増すのではないかと心配で生活もままならない。行政として何とかならないのか、と訴えます。

相談を受けた窓口も対応に苦慮します。この状況ではどうすることもできません。まさか、一子さんに住宅を出ていくように促す権限もありません。

そこで、一子さんの事で困っているシズエさんの話を聞かせて欲しいと持ちかけ、シズエさんの元へ訪問することにしました。

あまり体調がすぐれない、と周囲へ話していたシズエさんではありましたが、ケアマネのこの申し出にはすぐに応じてくれたシズエさんです。早速、シズエさんの元へ訪ねたケアマネは、「今日は、シズエさんのお話を聞かせてください。今、一番シズエさんが困っていることなどあれば話をしていただけますか？」ケアマネが言葉をかけると、シズエさんの口からはこんな言葉が出ました。

「お隣のことはいいんです。最初は、色々な疑いを掛けられて、周りの人にも変な目で見られ、辛い時期もありました。でも、今は、もうお隣が、でたらめを言っているのは皆さんわかっています。息子も、構うな、放っておけ、と言います。私もできるだけ、お隣と顔を合わせることをないようにしているのです。私は、最近体の調子も思わしくなく、外出も減って家にばかりいるので、考え込むとそればかりになってしまって。でも、お隣の事は構わないでいるしかないことも、私が気にし過ぎていることもわかっているのです。だから、お隣のことはいいのです。」

一子さんとのことは、シズエさんの中では十分に整理され理解している口ぶりです。周囲に言われることも、自分自身が少し気にしすぎることも十分理解しているようです。

では、シズエさんの訴えは何だったのでしょか。ケアマネは、これまでシズエさんが周囲へ訴えていたこと以外に抱えている思いがあると感じ、シズエさんの話に耳を傾けました。

「私は、東北の出身です。」と話を始めるシズエさんです。自身の生まれの話や、出身地を離れ、北海道に来たこと、そこで、見染められご主人と結婚したこと。結婚後しばらくの間は、同居していた義兄が離婚したこともあり、義兄の子供たちを育てながら自分の一人息子も育てていたこと。子育ての傍ら農家へ働きに出かけ、家計を支えていた矢先、事故にあい体に不自由を伴ってしまったこと。夫の転勤のため、北海道を離れ東京で暮らす頃には、夫も役職がつき安定した生活が得られ、職場のご婦人たちとの交流も楽しんでいた話、シズエさんの人生が

淡々と語られます。

自分の人生を振り返りながら、その時々起こった出来事に、苦労したこともあったけれど、自分の忍耐と夫の支えがあったことが、幸せだったと話します。思いがけないご主人の発病と急死は辛かったと涙ぐみます。

妹を頼ってやってきた北海道へは、一人息子が心配して一緒に来てくれたことはありがたいが、「主人になら相談できても、息子には相談できないこともあるし、息子の言葉は主人の言葉ではない。」と、さみしい思いを語ります。ケアマネが、シズエさんの語る長い人生の道のりをうなずきながら聴いていると、かれこれ2時間が過ぎていました。一子さんの話は出てきません。

話が一段落すると、シズエさんは、我に返り冷静に、「ごめんなさいね。私の話を聴いてもらって。主人がいたら主人に話すのでしょうけれど、息子には話せませんから。私、ずっと自分さえ我慢すればいいと思って生きてきた人間だから・・・そして、私の我慢強さは主人がよく理解して支えてくれていました。」お隣の事は、わかっています。でも、何かが起こってから誰かに言っても、しょうがないでしょ。だから、皆さんに知っておいて欲しかったのです。お隣さんのことは、皆さんが言うように気にしないようにします。私も、家にばかりいるものだから・・・」と話をまとめます。

シズエさんは、自身の生きてきた歴史を語る中で、我慢強い性格や、支えてくれたご主人の存在を思い出し、「自分」を感じていたのでしょう。そして、そんな「自分」を受け止めて欲しいという気持ちがあったのでしょう。一番の理解者が今は亡きご主人であり、仏壇に飾られた写真を眺めながら、ケアマネに対してではなく、いつしかご主人の写真に語りかけていました。それは、シズエさんが自身の抱えている問題にしっかりと対峙している姿にみえました。

「シズエさん、もし体の調子が良かったら、何をなさりたいですか？」ケアマネは、シズエさん自身の今後の希望を尋ねました。それは、残りの人生を歩むシズエさんへ希望の光を見つけて欲しかったからです。

シズエさんは、しばらく考えて「そうね、私旅行が好きでした。体の調子がよくないから、あまり遠

くには行けないけれど、近くでも・・・日帰りでも行けたら、どこか、行ってみようと思います。」そんな言葉と、その表情には微笑みが浮かんでいます。

「それは、素敵な夢ですね。お身体の調子がよければ、どちらか行かれるといいですね。」そんな、言葉をかけ、その日の2時間半にも及ぶシズエさんとの時間を終了しました。

「ありがとうございました。皆さんに気にかけてもらって・・・。さん(包括支援センターの担当職員)にも、お礼を伝えてください。私の事、心配してくださっていたのですね。」

そんなやりとりをしてシズエさんと別れました。

シズエさんが訴えた言葉(一子さんに対する苦情)と、受け止めて欲しかった気持は一致していませんでした。シズエさんが、一子さんの迷惑な言動や行動に悩んでいた裏側には、思いがけない人生の選択(ご主人の死や親しい環境を離れ転居したことなど)に伴う自身の葛藤や乗り越えてきた心情を誰かに理解してほしいという気持ちがあったのではないでしょうか。

自分の人生の道のりを語ることで、心の中にいつまでもご主人の存在があることを再確認して、元気になったように見えました。

そして、地域の関係者たちが、それぞれ(一子さんとシズエさん)のプライバシーに配慮しながらも連携をとり、必要なタイミングでの支援を提供したことで、シズエさんに笑顔が戻りました。シズエさんの心の中にも、「(一子さんは)仕様のない人だ。」というあきらめの気持ちが、マイナスにではなく、一子さんを受けとめる力にいくらかでもなったように思います。

シズエさんに対するケアマネのアプローチは、一子さんを取り巻く環境に対するソーシャルワークの一部としての援助展開だと認識しています。こうやって、また一つ、地域住民や、関係機関がつながり合っていることを確認しながら、集合住宅のお隣同志が、壁を隔てて元気に暮らし続けることを見守っていかうと思います。

* プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。